慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーサー・ペンティの歴史観（一）
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.1 (1921. 1) ,p.115- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210101-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

bwaliga であつた。娘の子供は mabi と呼んだが、此の言葉は亦妻の兄弟姉姉にも用ひられる。且つ最後に母の母は姉と同じく tuaga と呼ばれた。

叙述を簡單にする爲めにある男が其の娘の娘と結婚すると假定することにした。然し等級別の原則に依つて其の男の兄弟の孫娘と結婚した場合も同樣に云へるのである。こゝにも又共通がある。即ち夫の兄弟と母の父とを共に sibi と稱したのである。是は自身の孫娘と結婚する時は生じない筈であるが、兄弟の娘の娘と結婚すれば極めて自然な結果である。即ちAの兄弟がeと結婚した場合である。而して恐らく Pentecost の結婚は娘の娘を妻とするよりも、兄弟の娘の娘を妻にする方が多かつたのであらう。

John Pantutun と話した後、幸に Pentecost 人の一人に會つた。其の者の云ふところに從へは、自身の孫娘との結婚は禁ぜられて、唯兄弟の孫娘にのみ制限されて、今尙ほ現に存在して居ると云ふことである。此の事實は更に Australia の Dieri に於いても存在して居たとのことであるが、こゝには煩はしいから省略する。（Howitt:—"Native Tribes of South-East Australia." pp. 164, 177.）

斯の如き事實が如何にして心理學的に說明することが出來るか。祖母と姉妹、義兄弟と祖父、是等の間に心理的類似があるだらうか。特別な社會の親族關係を離れては何等の類似も認められない。よし斯の如き心理的類似ありとするも、それならば何故 Pentecost や Dieri に限つて言語上に現れたのか。斯の如きは唯其の特異の社會狀態ありしが故のみ。

吾人は以上の論述に依つて等級制度の特種の形式が特種の社會組織に基くことを明かにした上は、更に一歩を進めて如何なる程度まで現に存在して居ない社會制度を、其の制度の結果とする親族關係の言辭の內に發見して是を確實になし得るかと云ふ問題に就いて論じなければならない。（未完）

アーサー・ペンティの歷史觀（一）

加田哲二

一

ある社會思想の根本觀念の構成される基礎となるものは、多く歷史的經驗の認識である。Kropotkin の無政府共產主義は、そが多數の批評家によつて、空想的であるとせらるゝに拘らず、Kropotkin 自身は全く科學的研究の結果到着した所であるとしてゐる。即ち人間の理智を超絕した相互扶助の社會に存することに立論し、人類本來の性質が自由發意と自由合意とに存し、從つて、人類は外的壓迫より免るるときのみにおいて、その眞の性質を發揮すとなした。かゝる點から彼はその無政府主義に到達してゐる。而して、彼は產業界の趨勢が集中より分散へ行き、人間が何等の報酬てふことを考へず、たゞその必要てふことを思ふときにのみ社會的進步は可能であつたと云ふ點から、その共產主義に達し、かくてその全體の社會思想たる無政府共產主義に達してゐるのである。（相互扶助論 大杉榮氏譯、Anarchist Communism, Anarchist Morality, Conquest of Bread. 大杉榮著クロポトキン研究參照）

集產主義に就ても同樣のことが云へやうと思ふ。集產主義の一例として、先づ Sidney Webb を

取つて見ると、彼も亦歴史的經驗の認識を以て、その集產主義の理論的根據の一半としてゐる。彼が集產主義、即ち生產資本（土地を含む）の公有を主張したその理論的根據の一は Ricardo から Henry George に利用され、更に Webb 並に Bernard Shaw によつて擴張された地代論であり、その二はその社會進化論である。彼はその小著 Towards Social Democracy ? の中において、英國社會の發展の傾向を論じて、そが個人主義の方向から經濟生活の社會化の方面に進んで行くことを指摘し、さうして彼自身の集產主義の理論的根據とすると共に、その社會的發展の速度が革命的でなく、進化的（漸進的）であることを論じて、フエビヤン社會主義の特異の方法であるその漸進主義、Hannibal との戰において時機の到るのを隱忍して待つてゐた Fabius の如き態度を辯護し、急激なる社會的革命主義を斥けたのは、皆その歴史的經驗の認識にその基礎を置くのである。

更らにマルクス主義に至るとその全伽藍は一の歴史觀の上に礎かれてゐると云つていゝ。その經濟學說においても、その社會學說においても、また Marx の思想に出發する社會民主主義の政綱（一八九一年のエルフルト政綱に就て云ふ。）においてもその理論の根底に横たはる思想は Marx の歴史觀である。斯の如く、社會思想における歴史觀はその根本觀念を形成するものであるから、社會思想の研究において、歴史觀は最も重要な部分の一である。かゝる意味から、こゝに少しく、ギルド社會主義者としての "Arthur J. Penty の歴史觀を紹介して見たいと思ふ。

II

扨て、主題に入るに先き立つて、Penty のギルド社會主義における立場を論じて置きたいと思ふ。Penty はギルド社會主義史上における巨星である。彼が千九百六年出版した The Restoration of the Guild System は、A. R. Orage が同年 Contemporary Review に寄稿した一論文と共にギルド社會主義思想の最初の表現として有名である。彼はその後 Old Worlds for New, 1917. Guilds and Social Crisis, 1919. A Guildsman's Interpretation of History, 1920. を著はしてゐる。

ギルド社會主義は、之を分て、二派とすることが出來る。National Guild と Local Guild とである。即ち地方的にギルドを組織して、小規模產業に歸へらうと主張するものと、現在のやうな國民的基礎の上にギルドを建設して行かうとするものとである。さうして雜誌 "New Age" 並に "Guildsman" の一派、即ち Orage, Hobson, Cole, Mellor 等は前者に屬し、Penty は後者に屬してゐる。この兩派の差異を簡單に云つて見ると次の通りである。National Guild 論者は現在資本主義の精隨を賃銀制度にありとし、この賃銀制度なる奴隷制度より、生產者を解放することによつてのみ、資本主義の社會的疾患である生產者の隷屬の解放が成就せられるとする。さうして生產者の解放が行はれた曉においては、今日の國民的に組織された產業的勞働組合が、明日の產業を運用すべき National Guild となる。從つて、この論者は今日の大規模產業を敢えて否定せず、この中に包含されてゐる「隷屬」を廢止して、生產者をして眞の產業統制に參加せしめやうと主張する。從つて產業方法は機械的生產を採用する。たゞ現在の資本主義下における狀態と異る所は、資本主義においては、機械が生產者の主人があるが、來るべき制度に

おいては、生産者が機械の主人であることである。然るに Local Guild の主張者は、資本主義の精髓が商業主義 Commercialism にありとし、換言すれば、資本主義の根據が profiteering にありとする。從つて、資本主義よりの解放は、Profiteering の廢止にある。この營利を廢滅させる爲めには、ある一定の公正なる價格 Just Price を制定しなければならない。然るに公正なる價格を制度するのには、生産物の品質の檢定を必要とする。この生産物の品質の檢定には專門家を要する、換言すれば生産物の品質を決定すべき Guild がなければならない。これが Penty のギルド社會主義の要求である。而して Penty は資本主義における Profiteering は大規模生産は必然的に附隨するものであるとしてゐる。彼は曰つてゐる「大規模産業は必然的に利潤の爲めに生産する。何となれば、そは資本家 financier による産業統制を包含するからである」と。(Old Worlds for New. p. 69) だから國家社會主義は國家資本主義であると評すると共に、National Guild における國民的生産にも贊同することをしないのである。從つて彼は大規模生産の手段である機械生産に反對する。工匠 Craftman はその手で物を生産する人のみが解することが出來る自然の自負と興味とを持つてゐる。さうして機械生産はこの自負と興味と、即ち藝術的色彩を生産から奪ふものである。故に生産に藝術を體現せんとするものは、藝術を破壞する機械と絶緣しなければならない。かくて Penty はその復古的色彩を鮮明にして、中世ギルドへ歸れと主張する。ギルドへの復歸は、デモクラシーを！て眞に社會の總意の反影であり、政治家の奸計から免れて、眞のデモクラシーであるギルド・デモクラシー Guild Democracy を樹立することである。(Old World for New. p. 58. p. 52.)

斯樣に Penty の Local Guild 論と他の National Guild 論との差異は顯著である、けれども、Penty は全然 National Guild System に對して反對するものではない。彼は、このことに就いて次のやうに云つてゐる。「私の主張する Local Guild の組織は直ちに實行し得るものとは一般に認められてゐない。私はこの見解に對して全く贊同するものである。私は、現今において、斯やうな組織が實際政治とは、餘りに懸け離れてゐるので、調和し得ないことを明かに見ることが出來る。さうして賃銀制度の廢止をその要求としてゐる National Guild の政策が最も時機に適してゐることを承認する。然しながら National Guilds はこの問題を解決する終極のものではなし」と。(Old World for New, pp. 8-9) 即ち彼は National Guild を以て、Local Guild に至るの一階段としてゐるのである。故に Penty は National Guild 運動に贊成し、且つ National Guild League の執行委員の一人である。(Hobson:— National Guilds, Cole:— Self Government in Industry. Penty:—Guildman's Interpretation etc. Old World etc. 室伏高信氏著ギルド社會主義第一卷　二四三——二五二頁　參照)

III

以上の論述によつてギルド社會主義における Penty の地位を大體了解することが出來たと思ふ。從つて問題は直ちに彼の歴史觀に移るのであるが、Penty の歴史觀は Karl Marx の唯物史觀並に階級闘爭論の批評に出發してゐる。故にこゝに概略ながら、唯物史觀並に階級闘爭說に關して說くことが必要である。

Marx の唯物史觀の發達については、問題外であるからこゝに論ずる必要はない。(この點に

關しては Edwin Seligman :—Economic Interpretation of History. Part I. Chap. III. を參照）而してまたその最も重要の文献である Zur Kritik der Politischen Oekonomie 1859 の序文は屢々人の引用する所であるから、こゝに掲ぐるを要しない。たゞその内容は行論上省略することを得ないから、こゝにはたゞ彼の共働者であつた Friedrich Engels の所論を引用して置かうと思ふ。Engels は唯物史觀について次のやうに述べてゐる。「共産黨宣言は私共（Marx, Engels）の協同の産物であるが、私は、その精髄を形成する根本の命題は Marx のものであると云ふべき義務を持つてゐるやうに考へる。其の命題と云ふのは次の如くである。すべての歴史の時期において、當時行はるゝ經濟的生産並に交換の樣式と、是れより必然的に生ずる社會組織とが、時の政治的並に智的の歴史の基礎を形成し、且つこの基礎のみよりして、政治的並に智的の歴史は説明せらるるものである。從つて人類の全歴史（土地を共有してゐた原始的民族社會の解體以後の）は階級闘爭の歴史である。即ち奪掠する者と奪掠せらるゝ者、支配する階級と壓迫せらるゝ階級との闘爭である。故に是等の階級闘爭の歴史は進化の連續である。さうして現在においては、掠奪され、壓迫せらるゝ階級即ち無産者階級が奪掠し、支配する階級即ち有産者階級の支配から解放されるには、同時に、社會全體をすべての奪掠、壓迫、階級差別並に階級闘爭から解放しなければならない階段に達したのである。」（Preface to English Translation of "Communist Manifesto" 1888）また彼は他の著書の序文において、唯物史觀を定義して次のやうに云ふ。「唯物史觀とは、すべての重要な歴史的事件の窮極な原因とその偉大な原動力を社會の經濟的發展、即ち生産並に交換の樣式の變化、及び之に伴なつて社會が利害の相反する階級に分割される事情に求めんとするものである。」（Socialism, Utopian and Scientific. Introduction）而して更に Engels はその著の本文において「斯樣な見地から見れば、すべての社會的變化並に政治的革命の最後の原因は、人間の頭腦、即ち永遠の眞理並に正義に對する洞察に求むべきではなくして反つて生産並に交換の樣式の變化に求むべきである。その原因は、その特定時代の經濟學に求むべきであつて、その哲學に求むべきではない」と説明してゐる。

斯くの如く説明される唯物史觀の主張者である Karl Marx は哲學上においても、所謂唯物論者であつたか。この問題は Penty 並にその一派が特に理想主義を標榜してゐるので少しく論じて置く必要がある。Marx の云つてゐる所を見ると彼は哲學的にも唯物論者であるやうに見る。彼は Hegel を批評して云つてゐる「Hegel に對しては人間の頭腦の生活過程、即ち思惟の過程 —— Hegel はこの過程に「觀念」なる名稱を與へて獨立の主體とさへしてゐる ——が現實の世界の造物主であり、現實の世界は、たゞ「觀念」の外的現象形態に過ぎない。然るに私にとつては、觀念は物質世界が人間の心に反射したもの、即ち物質世界が思想に飜譯されたに過ぎないものである。」さうして彼は「余は唯物論者であり、Hegel は觀念論者である」と云つてゐる。然し Adler（Kausalität und Theologie im Streite um Wissenschaft; Marx-Studien, I. pp. 303, 305）の如き有力な Marx 批評家は彼が絶對的の唯物論者でなくして、たゞ當時の理想主義者並に唯物主義者の形而上學的思辯に對する實證主義的反抗の意味において、斯くの如き

言をなしたものとしてゐる。また米國 Veblen (Quarterly Journal of Economics, XX, p. 581) の如きも Marx を以て哲學上において唯物論者であると云ふのは階級闘爭を以て、理性なく、自覺なき原因、結果の産物であるとするので、Marx が意識的に階級闘爭を主張した事實と撞着するとして、その主張を斥けてゐる。故に彼の學說は、生活の物質的資料に對する闘爭が、社會の發達を制約すると云ふ意味において、物質的であると云ふことが出來るのである。(O. D. Skelton:—Socialism, A critical analysis. p. 100)

四

Penty は、この Marx の唯物史觀に對して如何なる立場を採つてゐるか。この問に對する解答は Penty の歴史觀に對する第一歩である。彼の唯物史觀に對する態度は、Kant の批判哲學に

その援助を借りて、歴史學の根本性質から、歴史學が「無限に豐富なる現象の世界の中から特定の個體現象を「本質的」なるものとして抽出するにおいて初めて可能である」とし、さうして、「歴史を歴史ならしむる選擇原理は實に超個性的な、普遍妥當性を要求する「文化價値」である。價値と關係しない無限多數の現象のなかから、常に文化價値の實現に貢獻する特殊の現象が屹立する。之れ即ち歴史である！」とし、文化價値を以て、「規範としての道義的發展の法則」であるとする Schultze-Gävernitz の認識論的立場からではない。(Marx oder Kant? 佐野學氏譯マルクスかカントか　第四章唯物史觀說及其批評參照)そは、過去並に現在の歴史を觀察することによつて、Marx の云ふ所が、その實際と矛盾すると云ふ Edward Bernstein や David の立場に近いものがあるのである。

Penty は明白に次の文章の内に、その立場を語つてゐる。「階級闘爭說は社會の歴史の說明としては、奇怪にして謬れるものである。それは恰度注意して不幸な結婚を記述し、記述に殘つてゐないと云ふ理由で幸福な結婚の存在を否定するやうに、離婚裁判所の記錄から結婚史を編むやうなものである。Marx の主張する所は恰度そんな基礎の上に立つてゐるのである。それは誤つてゐる。然しそは彼の主張する所が謬つてゐるのではなくつて、彼が云ひ足らなかつたからである」と。「Guildman's Interpretation, p. 7.) また彼はマルクス主義者の主張を批評しながら、自分の立場を明かにしてゐる。曰く「マルクス主義者が社會的進化と稱してゐる所のものは、斯くの如き教義（例へば中世の公平なる價格と云ふやうなもの —— 筆者）の社會的並に經濟的結果に過ぎない。そは彼等と雖も本能的に認めてゐる眞理である。何となれば彼等は、彼等が雄辯に物語つてゐる黄金世界の招來を盲目的な歴史的過程に放任せずに、勞働者の心の内に、階級的意識の教義を敎へ込むことによつて、之を促進せんとするからである。」(Penty:—op. cit. p. 309) 斯樣な立場から Penty は唯物史觀に對して批評し、更らに進んで自己の歴史觀を述べ、單に談理に甘んぜずして、自ら創作の人となつてゐるのである。（未完）

ギルドの起源に就いて

園　乾　治

ギルドは歐洲文明史上に於いて決して看過することの出來ない重要な役目を演じたものゝ一